PROJECT

生の複雑性を記述する

文
小田 亮・内藤順子

共同研究 ● 生の複雑性をめぐる人類学的研究：「第四世界」の新たな記述にむけて（2008-2011）

ことばでは語れないもの

2008年度から始まった共同研究「生の複雑性をめぐる人類学的研究：『第四世界』の新たな記述にむけて」は、テーマも具体的ではなく地域もさまざまであるが、研究の契機は、調査のフィールドで研究者が出会う極めて具体的な経験にある。すなわち、フィールドで出会った単独的・特異的な出来事や人を一般化された概念やことばで語ることの暴力性やもどかしさを痛感するという経験である。

たとえば、「貧困」や「貧困者」という概念は、援助のためにも必要とされている。けれども、それはつねに欠損を表すことばである。そもそも「貧困」自体が近代につくりだされた概念であるのに、それ以前から存在する生活の営みにもその概念をかぶせてとらえ、援助という名のもとにときに暴力すれすれのかかわりを持っていく（共同研究員・内藤順子の報告）。また、フランスの「マグレブ系移民」というカテゴリーは、大雑把すぎる括りで、世代がくだるにつれ、与えられたイメージに対応しつつも状況・時代適応的な変化をおこしており、現実の生の複数的なありかたをとらえそこねている（同・植村清加の報告）。あるいは、アイヌのごくふつうの日常には興味を示さず、差別問題を訴えて差別の悲惨さを語るアイヌの姿に目を輝かすシャモ（日本人）にうんざりしているアイヌの民族運動家たちも、状況に応じてときどき「アイヌ」になる（同・関口由彦の報告）。そして、フィジーにおける伝統から逸脱したハズレ者たちであるラミからさらにはずれたラミ退会者は、結局は「ふつう」の都市型生活者にみえるが、それは単純な伝統から近代への移行とは捉えられないし、ハズレ者として捉えることもできない（同・丹羽典生の報告）。さらに、ケニアで国内の民族紛争のために難民化したサンブル人が一見すると伝統的な大集落ロロラを形成しているが、これは「伝統回帰」という捉えかたでは理解できない（同・湖中真哉の報告）。

キリスト教徒の墓地を飾るチベットの伝統的祝布カタ。チベット仏教文化を代表するとされるカタだが、チベット人以外にも、「縁起のよいもの」として用いられる。チベットにおけるカタの象徴的な意味を保ちつつ、自分たちの表現の手段としている（2004年、インドのカリンポンにて、磯田和秀撮影）。

「第四世界」から「第四世界的状況」へ

このように一般化されたカテゴリーや概念からさまざまにはみ出ている世界や対象を、この共同研究では、とりあえず「第四世界」と呼んでいる。第四世界とはもともと、第一世界の内にある第三世界の様相を指していた。メンバーである棚橋訓の整理によれば、現在では第三世界というラベルからははみ出るような世界のありかたすべてにこのラベルが貼りつけられるようになり、いわば残余カテゴリーとして、社会的に排除された周辺的存在を何でも放り込めるブラックボックスと化した概念となっている。もちろん、「第四世界」という場やそこに生きる人びとに対しても、さらに細かい区分がなされ、あるいは新たな概念が創り出されていく。けれども、「第四世界」と呼ばれている場に暮らす人びとは、それらのカテゴリーを生きていながらも、それらのカテゴリーからのズレやはみ出しをも同時に生きている。そうしながら人びとは、「第四世界」という枠組みにおけるものとは別のものを生み出している。私たちはそのような状況を「第四世界的状況」と呼び、一般化された概念やカテゴリーを実体化したり細分化したりすることによってリアリティを認識・表象するのではなく、特定の場面に結びついたアクチュアリティとどのようにかかわり、どのように記述するかということを課題としている。

アクチュアリティを記述する

「第四世界的状況」のアクチュアリティを記述するという課題にとって、「第四世界」に代表されるような欠損を表す概念やカテゴリーを、そしてそれらを用いた表象を単に間違っているものとして批判したり、人びとを排除するものとして破棄したりするだけではすまされない。それらはグローバルな言説空間において実体化されており、そこにコミットするために必要とされるだけではなく、そのような場に生きる人びとにとっても現実（リアリティ）となっているからである。つまり、その枠組みに押し込められた存在は「第四世界」に馴染んで、その枠組みを作り出しカテゴリーを増殖させている他者の価値観とのあいだに生きており、それらのカテゴリーとズレを同時に生きているという「複雑な生」を営んでいるのである。

かといって、「概念やカテゴリーに還元不能な他者」とか、

「単独な出来事としての経験」とか「語りえぬものとしての生の複雑性」などと、ネガティヴに指し示すだけですますわけにもいかない。それでは対象となる人びとが営んでいる生や経験のアクチュアリティには届かないからである。語りえぬものであり、概念やカテゴリーに還元不能であることをわかったうえでなお、生の複雑性を描きだす努力の方向として、まずは、前提として言い継がれることばや概念や思考にいちいち引っかかること、雑多な日常における実践にたちあいかかわりながら、その生の複雑性を生活世界の側から具体的に記述することが必要なのであろう。

雑多な日常や生活世界から描くというと新鮮味に欠けるように思われるかもしれないが、問題は、そのリアリティを表象することではなく、そのアクチュアリティを記述することである。アクチュアリティの記述は、固定された場所からの認識・確認によるリアリティとは違って、他者と具体的にかかわりつつ、自分の視点をたえず転換させることによってなされる。それは、他者とのかかわりのなかで研究者自身の「自己」を問い直す作業ともなるだろう。そして、記述そのものが他者とのかかわりを作りだし、さらにまた別の記述を生みだすといったプロセスによって可能となるだろう。

そのような記述がいかなるものとなるのかという探究はまだ途上だが、研究会では、そのようなアクチュアリティの記述のための方向性として、たとえば湖中は、既成の言説空間で通用する「ガバナンス」などの諸概念を、人びとが生活の場で行なうなけなしの自助努力の経緯にたちあいながら微細に記述することで、それらの概念の意味をずらし再構築する、「概念再構築型記述」を提案している。また、磯田和秀は、植民地的権力関係の中で植民者と被植民者が「模倣・擬態」しあうことが固定された権力関係を揺るがすことに注目しながら、全体化された枠組みにおける「提喩的想像」（カテゴリーによるリアリティに相当する）に対して、全体化されない「換喩的想像」（カテゴリーからのズレに相当する）を提起している。それは、その場その時の模倣・擬態のように意味がズレながら連なっている記述といえるだろう。そして、関口は、「同質的なアイヌ性」など体現することのない生身のアイヌとの付き合いを通して、その「生身性」（生の複雑性）を損なわずに彼らと付き合い、そのかかわりのなかから記述することを「対話の手法」と称している。

ケニアのパイプライン国内避難民キャンプの子供達。ケニアでは2007年末の大統領選挙後に選挙結果をめぐって紛争が発生し、死者1,000人以上、国内避難民約30万人が発生する事態となった。紛争の被害が最も深刻だったのは、リフト・ヴァレー州である（2009年、湖中真哉撮影）。

東京で伝承されるアイヌ文化。2003年から毎年8月に、東京芝公園内の「開拓使仮学校跡」の記念碑の前で、アイヌ民族のイチャルパ（先祖供養）が行われている。祖先の苦悩に自らの東京での生活経験を重ね合わせた〈祈り〉に、いかに向き合うことができるのだろうか（2010年、東京・芝公園にて、関口由彦撮影）。

「第四世界的状況」によって語る

これらの指摘や招聘講師である關一敏や長谷千代子、川田牧人、鈴木晋介の各氏からの示唆が積み重なって研究の成果が形になりつつある。「第四世界」を問題化してその解決に取り組むことが、むしろ第四世界を支え、保証し、第四世界があたかも実在するかのような言説空間へと対象を囲い込んでしまうのだと。生の複雑性とは、一般化された概念によって固定的・一面的に捉えると見えてこない生活空間のなかでの暮らしぶりや馴染みかた、そこで生み出される「何か」についての目配りを促し、既成の言説空間での概念を懐疑的に再構築していくという方向づけをするためのタームにほかならない。その研究の意義は、「第四世界」に代表されるような概念の見直しの必要性を示し、その概念とはズレる現実（アクチュアリティ）を「第四世界的状況」と捉え、既存の言説空間に対して、第四世界的状況「について」のリアリティの記述ではなく、第四世界的状況「によって」語ることにある。

さきに、生活の場における他者とのかかわりのなかからの記述がまた新たな記述を生むと書いたが、それはこの共同研究の在り方と重なっている。参加している各世代の研究者が、それぞれの感覚を大事にしながら、固定された枠組みも物語もなしに、ちょうど連句のように、前の研究報告を受けた研究報告の連なりが、全体化されることなくかたちをなしていく研究会になっている。この研究会の在り方は、固定されたカテゴリーからズレていくアクチュアリティそのものであり、そのアクチュアリティを記述するやり方にもなっている。というよりそれは、わたしたちの世界との付き合い方にほかならず、記述することは世界とどう付き合うかということのひとつである以上、そのなかからしか「新たな記述」は生まれないとわたしたちは考えている。

おだ まこと

成城大学文芸学部教授。専門は社会人類学。著書に『構造主義のパラドクス』（勁草書房 1989年）、『構造人類学のフィールド』（世界思想社 1994年）、『レヴィ＝ストロース入門』（筑摩書房 2000年）ほか。

ないとう じゅんこ

日本女子大学人間社会学部学術研究員。専門は文化人類学。著書に『「境界」の今を生きる：身体から世界空間へ』（共編著 東信堂 2009年）、論文に「『下から』の人類学的開発援助」（『国際開発研究』17（2）2008年）など。